



日本宣教ニュース

NO. 10 2017年9月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」（コロサイ1:6）

【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、「第32回日本福音同盟（JEA）総会」（2017年6月5日～7日、コンコルド浜松にて開催）内で行われた、シンポジウム「日本宣教の課題と展望」におけるJEA宣教委員会宣教研究部門の発表原稿を掲載致します。

また、『中外日報』のオンライン情報から、宗教改革500年に関する記事を転載させていただきます。

「日本宣教の課題と展望」

JEA 宣教委員会宣教研究部門委員 福井 誠

1. 主旨

JEA 宣教委員会では、日本宣教に関する宣教研究部門を立ち上げることになりました。これは、「JCE6 日本宣教 170➤200 プロジェクト」の流れを引き継ぎ、TCU 日本宣教リサーチやJEA 加盟団体の宣教研究部門などと連携し、日本の宣教に関する有効な方策を検討し、打ち出していくことを目的とするものです。

具体的には、諸団体が抱えている実際的な宣教現場の課題についてのデータ収集や分析を行い、JEA 理事会、JEA 加盟団体に有用な情報提供および提案を行い、日本の福音宣教の推進強化に努めていくことを目的とします。

2. JCE6 データブックを踏まえて

(1) 宣教課題のリストアップ

既に、JEA 宣教委員会では、東京基督教大学の山口陽一氏、日本宣教リサーチの柴田初男氏、さらに中西雅裕氏を初めとするJEA 旧宣教委員会が合同して、日本の宣教の課題についてまとめ、JCE6 においてもこれを発表し、『データブック 日本宣教のこれからが見えて来る』を出版しています。

それらは具体的に、①日本宣教200年の推移と展望、②日本社会と宣教、③都市と地方の問題、④在日外国人教会の実態、⑤在日宣教師、⑥海外日本人教会、日本人集会の実態、⑦子ども、青年、⑧神学校、⑨メディア伝道、⑩震災と信仰調査という10項目における課題を大まかにまとめ上げたものです。

研究手法としては、力技になるのかもしれませんが、課題とされていることを一挙にリストアップし、それらに関係者の経験値を活かして分類し、優先順位をつけて一つ一つ取り組みとしていく最初の試みになったと思われます。これから修正を加えたり、いくつか追加データを拾い直していく必要もあつたりするかと思いますが、より実践的な、現場サイドの宣教活動に役立つ提言、提案をする出発点に立つものとなった、と思っております。

(2) 目標

たとえば、現在、日本のキリスト教会の受洗者数は、毎年1教会あたり1人です(毎年1人受洗者を出している教会は、教会のサイズに関わらず、キリスト教会の成長に貢献している教会である)。一方、人口動態統計の動きからすると、日本の死亡率(召天者率)は、約1%つまり、1教会あたり毎年1人は確実に人数が減っている状況があります。しかもキリスト教会は、一般社会に比べて高齢者がより多く集まっている特殊なコミュニティとも言われていますから、教会における死亡率は、一般よりも高く約1.5~2.0%台と考えられます。となれば、毎年1人の受洗者を出すだけでは、日本のキリスト教会全体の教勢を維持することができないことになります。さらに言えば、宣教の1%の壁を破るには、毎年1人の受洗者では当然のところ難しく、それ以上の、一教会あたり3~5人の受洗者を、毎年平均的に出していく必要があることになります。

では、そのためにはどうしたらよいか、ということ、具体的、実際の宣教の現状を調査し、理解を深め、提言をしていくのが宣教研究部門の使命と言うわけです。

ちなみに、日本は宣教170年で約1%未満のクリスチャン人口ですが、インドは、トマスの宣教以降、宣教2000年の歴史がありながら、約4%程度のクリスチャン人口です。しかも日本とインドは極めて宗教事情がよく似ています。インドは、ヒンズー教という教祖のない民間信仰と佛教が共存する土壌、日本も神道という教祖のない民間信仰的な国家宗教と佛教が共存する土壌、いささか乱暴な言い方かもしれませんが、日本も2000年かければ、4%まではいくのではないのか、と言う気もいたします。神様の御心がそこにあるのかどうかわかりませんが、神様の御心は、後30年にあるのかも知れませんが、精一杯、宣教推進のために出来ることはさせていただきたい、と言うところかと思えます。

(3) 課題の紹介

そこで現場サイドの政策提言と申しましても、その課題も様々です。データブックの中から、それらの幾つかをご紹介しますが、大切なことは、これらの課題の内の優先順位を決めて取り組み、一つ一つ片づけていくということであろうかと思えます。その課題としては、

A. 日本社会と宣教

まず日本の社会を見るにつけて、

- ①急速な「少子高齢化社会」の到来により、人口減少と老年人口の増加が進んでいます。日本は、近い将来、3人に一人が高齢者になると言われます(2.5人に1人が65歳以上、4人に1人が75歳以上になり、女性高齢者の5人に1人は一人暮らしとなる)。そして、男性の生涯未婚率は、30年前と比較すると男性で約18%、女性が6%増えているとされます。さらに問題なのは、人間の抱える問題が複雑化していることです。心の病の急増、自殺率の高さ、家庭での幼児虐待や家庭内暴力の増大、また、安易な結婚と離婚による家族の崩壊、頻発する無差別殺傷事件等多くの社会問題が表面化しています。
- ②また日本の宣教は、もともと仏教、神道、儒教と宗教の多元化した文化の中で進められており、それ自体が課題でありながら、さらに3.11以降、キリスト教内の多元化(福音派、主流派、カトリック)における宣教協力等が課題となってきています。また、葬儀の考え方が多様化する中で、日本の宗教の根幹をなす葬送儀礼に、信仰を問わず関わる問題も検討され始めています。

こうした中で、近年急速に取り上げられているのが、「宗教の社会貢献」「地域社会をつくる宗教」への関心と期待の高まりで、福音の包括的(ホーリスティック)な理解や宣教観の見直し、つまり教会と家族、企業、学校、福祉施設、行政、各種NPO等との関りの在り方が、見直されています。

B. 都市と地方の問題

過疎化の進む地方においては、牧師不足の中、無牧教会の増加、教会閉鎖の危機が顕著となり、青年信徒の都市転出や教会の高齢化が加速する問題があります。

これらは古くから指摘されて来た問題ですが、いよいよ地方教会で起こっているこうした諸課題に、都市教会も関わる中での解決の道筋を見出すことが急務となっています。そこで、

- ①「1教会1牧師」の見直し
- ②信徒伝道者の育成
- ③自給・自活伝道の積極評価
- ④都市教会と地方教会の連携

等諸方策が検討されていますが、より実際的なソリューションを現場に寄り添いながら検討する必要が出て来ています。

C. 子ども、青年

キリスト教会における次世代、つまり子どもや青年に関する問題は、常に繰り返し議論されてきた問題です。しかしながら、この問題は、少子高齢化、青年信徒の都市転出、地域格差、さらに子ども環境の悪化、深刻化、教会内のクリスチャン2世の増加という社会変動の中で考えられていく必要があります。

今から17年前ですが、私は、2000年に、軽井沢恵みシャレーで行われたJEAの第三回宣教推進会に呼ばれて次世代の宣教についてお話をしたことがあります。

その際に結論的にお話ししたことは、

① 宣教の偏りの是正

離婚、機能不全家族、教育法規、虐待、貧困、いじめ、非行などの諸問題を抱えた子どもに宣教の関心が偏り過ぎていること、クリスチャン2世が増えつつある、いわゆる普通に暮らしている子どもへの教育的課題への取り組みが必要であること

② 複合的対応力のある人材育成

いわゆる諸問題を抱えた子どもへアプローチするための、知的、霊的、実践的(複合的)に対応のできる教会学校教師の育成

③ 10代の伝道者が活動できる伝道環境を整える

クリスチャン家庭で育ち、10代で信仰を継承していく子どもたちが、活動できる伝道環境を整える。

続けてこうした提案が深められていく必要がある、ということです。

(4) 在日外国人教会

国際化の時代の流れの中で、日本国内で進められている在日外国人教会の働きについて本格的に理解する必要が出てきています。確かに、これまで日本国内での在日外国人教会の働きは、十分解明されていませんでした。そこで、

① 実態を統計数値的のみならず、質的にも理解する必要が出て来ています。

② また明らかにされて来た在日外国人教会とのいかなる連携が可能であるかが模索される必要があります。

そういう意味では、日本伝道会議のためにまとめられたデータブックの編集は、『クリスチャン情報ブック』などに収録されている在日外国人教会について、最新の包括的、網羅的な情報を整理するきっかけとなりました。そこで、継続して、今後は統計情報のみならず、在日外国人教会の質的な実態がより見えてくる調査が必要とされています。

(5) 海外日本人教会・集会

同じ国際化の時代の流れの中で、意識化されてきているもう一つの問題が海外日本人教会・集会の問題です。確かに、これまでの日本の宣教には、ディアスポラ宣教という視点が不十分でしたし、国内の教会に、そうした海外日本人宣教の働きは十分に知られていませんでした。特に在外日本人宣教については、家庭集会的な働きもあり、統計的に出しにくいものがたくさんあることからよく知られていません。

そこで、在外日本人宣教に関する、最新の包括的、網羅的な情報を整理し、国内の教会とどのような連携が可能かを検討する必要が出て来ています。

(6) 在日宣教師

現在、日本には非常に多くの来日宣教師団(ミッション団体)が存在し、来日宣教師が多様な働きを行っています。また、組織的に登録されている宣教師以外にも、韓国や台湾等の宣教団体から直接派遣されて活動されている宣教師も存在し、全体としての来日宣教師の総数は正確には掴みきれていません。

また、戦後70年が過ぎ、宣教師のイメージも様変わりしてきています。いわゆる西洋系の宣教師から、韓国、シンガポールなどアジア系の宣教師が増加しており、また、それに伴い、宣教師の働きや日本の教会との関係の在り方も変化してきています。そのような状況の中、以下のような課題が指摘されています。

① JEMA(日本福音宣教師団)登録簿では把握しきれていない宣教師の実態把握

② 宣教師像の多様化に伴う、問題状況の共通理解の促進

③宣教師の受け入れ、訓練、配置に関わる諸問題。派遣前の資質の見極めと適正な訓練の強化、あるいは、適切な働きや働き場へのマッチングの問題、こうした諸課題に必要なデータを十分に集めながら、より実地的な提言が必要とされています。

(7) メディア伝道

これまで放送伝道については、あまり包括的、網羅的な統計は発表されてきませんでした。どんな番組がどんな地域に、どんな時間に放送されているか、どんな視聴者がこれを聞いているかなど、あまり整理されて理解はされていませんでした。個々の放送伝道団体では、独自の分析がなされていても、教会や諸団体が、宣教の戦略としてこれを理解している、ということはあまりなかったのです。しかしながら、

- ①過疎化などにより教会未設置地域が広がりつつあること、特に地方において、教会に通い続けることのできない高齢者に対する、霊的なケアの問題が現実問題になっていること、さらに、インターネットや SNS の活用がより日常的なものになったという社会変動の中で、これをどのように活用していくか、そして提供された情報を、各教会や諸団体がどのように有効活用していくかが、改めて問われています。
- ②実際、教会における伝道と、電波による伝道を上手に連携させることで、放送による宣教、教育および、牧会の効果も期待しうると言われています。

(8) 神学校

最後に以上の宣教の根幹をなす、神学教育の問題があります。多くの神学校で、献身者の入学数が減少しています。ことに、近年は入学者が一桁、もしくはゼロといったケースも珍しくありません。またデータには見えにくい入学形態の変化も起こっています。つまり信徒コースや、夜間コース、通信科、分校の入学者、聴講生が増えていて、入学者数を維持している形態があります。入学者数に変化はなくても、その中身は本科生よりも、通信科の方が二倍強とかなり大きなウェイトを占めていることがあります。そういう意味で、通信科に力を入れ始めている神学校も多くあります。また、自分が育った教派・教団の神学校に行くよりも、超教派の神学校に推移する傾向も強くなってきています。そのため、教派・教団立の神学校の入学者数は減り、より大きな神学校への委託研修という形式が生じています。また、最近では、若くして神学校に入って来る神学生より、十分な社会経験をした上、何十年も教会生活を経験してから神学校に入って来る人が増えてきています。シニアコースで短縮した形で牧師になるケースも出てきています。

そういう意味で、検討されるべきは、

- ①神学校間の資源の有効な活用と、よき協力関係を育て上げていくこと
- ②実践に役立つカリキュラム
- ③信徒奉仕者の育成
- ④神学校と教会の連携
- ⑤多種多様な働き人を養成する神学校教育等への期待が高まっています。

3. 第一回研究担当部門会議

以上の種々多様な課題のどこからどのように整理をつけていくか、やはり、解決のポイントは人であろうと思います。つまりこのような諸課題に取り組むことへのやる気を持った人間が集まること。そういう意味で、こうした問題に関心を同じくする人々を集め、互いに情報を提供し合い、意見交換を交わし一つ一つソリューションを形作っていく、その手始めとして、宣教委員会宣教研究部門では、中西雅裕宣教委員長のリーダーシップのもと、第一回宣教研究部門担当者会議を開きました。

(1) 目的

目的は、以下のように設定いたしました。

- ①各教団教派の宣教研究部門の担当者が共に集まり、顔を合わせ、ネットワークを築く
- ②宣教に関して各教団教派で集められている情報を共有する。
- ③各教団教派でなされている宣教研究の結果を分かち合う。
- ④各教団教派が継続的な宣教の協力を進めていく礎を作る。

(2) 第一回研究担当部門会議の様子

去る5月8日13時～16時まで、お茶の水クリスチャンセンター411号室で、まず第一回目

の宣教研究担当部門会議を開催、約 18 名の参加と初回としては少ないものでしたが、非常に有意義な小グループの討議がなされたと思われま

す。第一回目に共有されたものは、TCU 日本宣教リサーチ柴田氏の「教会情報 Mapping System」（WEB 上で日本全国の教会情報を共有できるシステム）の構築についての発案、また日本同盟基督教団趙氏が日本同盟基督教団宣教研究所で実際に進めたアンケート調査の結果についてでした。日本同盟基督教団宣教研究所では、現在「教会自立への提言」を検討しており、教団の実情報告を分析し、過去 10 年間で礼拝出席者が増加している 19 教会を選び、受洗者・転入会者がどのように起こされているかを焦点に分析したもので、興味深い問題意識と分析手法に皆の関心が集まっていました。

(3) 評価

大切なのは、こうした各団体の取り組みが、情報共有されることで、いくつかの宣教促進効果が期待されることです。つまり、

- ① 研究や新発見、その他、各団体の現状について具体的に情報交換を行うことで、各教会、諸教派・団体などの共通した課題などが浮き彫りになる。実際、会衆制の諸団体は会衆制で、また監督制の諸団体には監督制で、よく似た課題を抱えています。
- ② ソリューションの進んでいる団体とそうでない団体が情報交換することで、参加団体全体の宣教の底上げの効果を期待することができる。実は、監督制の団体でありながら、また会衆制の団体でありながら、その制度をよりよいものに発展させてきている団体の事例もあります。企業にはコンサルが当たり前の時代ですが、そういう意味でも教会諸団体のコンサル的な働きも必要です。
- ③ さらに新しいソリューションを創造的に生み出し、難問奇問を突破する機会となる熱意を持った人材が集まり、ディスカッションをし、知恵を寄せ合うことで、新しい知の創造が起こる、そんな場となることが期待されます。

そういう意味では、今後もゆるいつながりの中で、年に一度の研究担当部門会議を開き、情報共有を進め、さらにソリューションを生み出し、宣教を一步推し進めるための協力体になっていくことができたらと考えております。

4. 方向性

そこで、研究部門では、この総会が終わりましたら、一泊のミーティングを開催し、今後の具体的な方針を話し合う予定でおりますが、

(1) 三つの戦略観点

宣教戦略部門として、少なくとも次の三つの戦略観点が抑えられている必要があるかと思

① 宣教の主体について

日本人キリスト者、教会(礼拝と交わり)、教派・教団、超教派、クリスチャン家庭、学校、企業

② 宣教の客体について

日本人の精神的特質、日本社会、組織、文化、新しい日本人、日本文化の創出

③ 宣教のアプローチについて

宣教方法論

つまり、教会を活性化するために教会だけを見ていてもだめで、教会を取り巻く環境を同時に見ていく必要がありますし、その上での宣教アプローチが重要になってきます。いつも、幅広い観点でこれを見るとということです。

青森県の弘前市のリンゴ農家を題材にした「奇跡のリンゴ」という映画があります。「Fruit of Faith(信仰の実)」という字幕のタイトルに魅かれて見た映画でしたが、青森県を舞台とし、家族を愛し、リンゴ農家の将来に夢を馳せた農夫、木村秋則の実話を基にした作品でした。財を使い果たし、村八分にされながら、絶対不可能と言われたリンゴの有機栽培を成功させた物語で、フィレンツェ映画祭で観客賞も受賞しています。その映画を見て、なるほどと思ったのは、リンゴの木はそれ自体で生きているわけではなく、それを取り巻く自然環境と共にあることに主人公が気づいた点です。リンゴの木だけではなくリンゴの木が生えている環境と、双方への取り組みが成功への転機となりました。実に単純なポイントでしたが、教会も同じです。教会はそれ自体で生きているわけではない。教会にいくら肥しをやっても、農薬を振りまいてもだめ

です。教会を取り巻く環境それ自体にも働きかけなければならない。JEA に宣教研究部門が出来た、ということは、ある意味でこれまでにない型破りな発想を持って、取り組んでいくことへの期待もあることでしょう。実際には、次の方向性による取り組みが期待されます。

(2) 今後の方向性

宣教委員会宣教研究部門として

A. 現場サイドに密着した調査研究提案をしていく

現場が直面している問題を聞き、光をあてつつ、協力してできることを探していきます。単なる学術的な研究調査ではなく、関わった人が得になるもの、現場に役立つヒント、戦略を考え、提案していきます。そのため、広い文献調査のみならず、フィールドワーク、観察手法を用いていきます。

B. 広範的、統合的宣教戦略を構築する

何とかしなくてはと言われるが、なかなか効果的な戦略を打ち出すのは難しい状況があります。しかし、超教派の協力関係の中で、もっと自由な創造的な発想で物事を考えていく場にしていきたいところです。たとえば、地方教会をどう助けるか、これを教団・教派レベルを超えて、さらに、放送伝道などのパラチャーチ活動を加えて、総合的に考えていきます。

また、青年伝道というが、実際には、ミッションスクールは、毎年 34 万人の卒業生を輩出している。しかし信仰を持って卒業する人の実態は明らかではありませんが、経験的にごくわずかであると考えられている。そういう意味では、ミッションスクール、地域教会、青年伝道協力体との連携のための話し合いの場が提供されるなど、ダイナミックな試みが進められていく必要もあります。

以上のような試みを年一度の宣教研究部門担当者会議にて分かち合い、実際に協力を求めていくことが考えられます。

① 調査研究発表および共有の場の提供

次回はぜひ、各教団・教派、諸団体で、代表者を送っていただきたいと思います。そこに出席された方々によって情報やソリューションを共有することができたら、と思います。

② 宣教協力のネットワークの基盤形成

1990 年代後半、文科省が、青少年の凶悪な犯罪が顕著になったことを受けて、全国の青少年相談関係者を集めて、研究会を開いた時がありました。私も青少年相談員として参加いたしましたが、結局そこで話し合われたことは、組織のネットワークではなくて、人のネットワークを作る、ということでした。組織のネットワークを制度化しても物事は動かない。熱意のある人と人が結び合うことで物事が改善されていく。そういう意味でのネットワーク基盤が出来ていけばと思っています。

(3) 第五の波に乗れるか?

最後にこのイメージ図は、皆さんもよく理解されていると思います。日本の宣教は、日本の文化や精神の「国際化」の波に乗る形で進んでいます。日本が国際化した時期は伝道の好機となり、ナショナリズムが強化された時期は、伝道の逆境の時と言われています。

① キリシタン時代: 群雄割拠の時代にあって、鉄砲などの武器を調達する、各藩の強化のニーズがキリシタン布教と絡み合いました。

② 明治開国: 近代化、富国強兵という政治的経済的ニーズがキリスト教の布教と絡み合いました。しかし、物質的国力や経済主義のみの近代化に留まり「精神の近代化」を果たさなかったとされます。

③ 戦後: 敗戦と戦後改革の中で、社会的文化的ニーズが、東の間のキリスト教ブームを引き起こしました。

④ 高度経済成長期: 宗教的・ご利益的ニーズがあり、宗教に傾く若者が増えたと一時期言われた時期がありました。

⑤ ここからは、近藤勝彦先生が『伝道の神学』という本の中で語っていることですが、今日は、高度技術による新たな文明のグローバリゼーション、経済や情報の全面的国際化の時代にある、これは、キリスト教にとっては重大な責任の時、また好機である、と。これをどう生かしていくか、宣教研究部門も調査研究と同時に、参加者と共に考え見出していきたいと思います。(以上)

宗教改革 500 年、争いから交わりへ

2017年2月10日付 中外日報（時事展描）

今年マルティン・ルターの「九十五箇条の論題」発表に始まる宗教改革から500年で、世界で記念礼拝やイベントが企画されている。これまでの100年ごとの行事と異なる点は、国内外で初めてカトリック教会との共同記念行事が実現することだ。ルーテル、カトリックの両教会が半世紀にわたり重ねてきた「エキュメニズム」（教会一致運動）の対話の成果を、この機会にアピールしたいと両教会関係者は願っている。（山縣淳）

ルーテル教会・カトリック教会が合同行事

今年11月23日、長崎市・カトリック浦上教会で「争いから交わりへ」をテーマに、日本福音ルーテル教会とカトリック教会によるシンポジウム・共同記念礼拝が開かれる。

1517年、ルターが「九十五箇条の論題」を発表したことが契機となった宗教改革は、西方教会の分裂や神学論争にとどまらず、三十年戦争（1618～48）の原因となるなど多大な影響を与えた。日本福音ルーテル教会の白川道生事務局長は「今の時代、宗教対立が世界的に起きている中で、両教会が対話し、共に祈る姿を可視化することが宗教改革から500年後の記念にふさわしい」と意義を語る。

イエズス会司祭の光延一郎・上智大教授も「そもそも、500年前の対立を日本人が引き継ぐ必要はない」として、「世界のカトリック教会の中では日本はローカルな地域の教会だが、その日本から一つになる姿を見せていく」と話す。隠れキリシタン、被爆の歴史を持ち、信仰の自由や平和を想起させる長崎を開催地とすることで日本ならではの発信ができるという。

また、光延氏は「世界史の教科書で宗教改革について学ぶが、その後、（カトリック教会とルーテル教会が）交わりへ向かっていることは知られていない」と、一般社会に両教会の対話が知られることを期待する。

半世紀の対話実る

すでに海外では宗教改革500年を迎えるに当たり、昨年10月31日、スウェーデンで教皇フランシスコとルーテル世界連盟のムニブ・ユナン議長の前で「共同の祈り」が行われ、二人が調印した共同声明が発表された。

共同の記念行事が実現するまでの両教会の対話は半世紀に及ぶ。カトリック教会は「第2バチカン公会議」（1962～65）以降、エキュメニズムに取り組み、ルーテル教会とは67年から神学的対話を重ねた。

その成果として、99年には「義認の教理に関する共同宣言」を発表。宗教改革の論点となった「信仰のみによって人は義とされる」という信仰義認説へ共通理解を示した。

2013年には宗教改革500年へ向けての共同文書「争いから交わりへ」で宗教改革の歴史、ルターの神学の共通理解がまとめられ、両教会の歴史の中の過ちを認め、一致を両教会の責務とした。共同声明に「ひとつの聖卓で聖餐を受けることを心から願っています」とあるように、カトリックでは信徒以外に「聖体拝領」を行わないため、聖餐を共にできない問題など残る課題もあるが、声明は両教会員に「争い」よりも「一致という神の賜による協働」を説き、「愛の真実の使者」となることを求める。

白川事務局長は、これまでの半世紀の対話は式文や典礼の問題など両教会間の神学理解に比重が置かれていたが、これからのエキュメニズムは分裂した両者が現代の共通の責務について対話し、共に環境や格差などの問題に取り組む姿を見せることが大切と指摘。そして、共同の事業を通じ、「エキュメニズムが次の時代の新しいビジョンとなる言葉だと示したい」と力を込めた。



教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会（会報 2017 年 6 月号 公文書）

2017年世界召命祈願の日 教皇メッセージ

「聖霊によって宣教へと駆り立てられて」

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

わたしたちはこの数年、キリスト者の召命の二つの側面について考えてきました。一つは主の声を聞くために「自分自身から出る」よう求める招きであり、他方は神の召し出しが生まれ、はぐくまれ、明らかにされる、恵みあふれる場である教会共同体の重要性です。

第54回「世界召命祈願の日」にあたり、わたしは今、「キリスト者の召命の宣教的側面」について考えたいと思います。神の声に引き寄せられ、イエスに従う道を歩む人々は、宣教と愛の奉仕を通して兄弟姉妹に福音を伝えたいという、抑えられない願望を自らの内に容易に見いだします。すべてのキリスト者は福音宣教者とされています。キリストの弟子は実際、個人的な慰めとして神の愛のたまものを受け取るのでも、自分だけが高めるよう招かれているのでも、経済的な利害に気を配るよう求められているのでもありません。ただひたすら神に愛されていることを喜び、その喜びによって変えられ、その体験を自分だけのものに留めておけないのです。「弟子たちの共同体の生活を満たす福音の喜びは、宣教の喜びです」（教皇フランシスコ、使徒的勧告『福音の喜び』21）。

このように宣教という使命は、キリスト者の生活に飾りのように付け加えられるものではなく、信仰そのものの核心です。主との結びつきには、みことばを告げる預言者として、また神の愛のあかし人として世界に派遣されることが伴います。

たとえ自分の弱さを痛感し失望していても、わたしたちは無力感に襲われたり、悲観主義に陥ったりせず神を仰ぎ見るべきです。悲観主義は、わたしたちを単調で色あせた生活の消極的な傍観者にするだけです。恐れてはなりません。神ご自身がわたしたちの「汚れた唇」を清めに來られ、わたしたちを宣教にふさわしい者にしてください。「これがあなたの唇に触れたので、あなたのとがは取り去られ、罪はゆるされた。そのとき、わたしは主のみ声を聞いた。『だれを遣わすべきか。だれが我々に代わって行くだろうか。』わたしは言った。『わたしがここにおります。わたしを遣わしてください』」（イザヤ6：6-8）。

すべての宣教する弟子は、「よいわざを行い、すべての人をいやした」（使徒言行録10：38 参照）イエスと同じように、人々のもとに「出向く」よう招く神の声を心の中で聞きます。すべてのキリスト者は、洗礼の恵みによって兄弟姉妹に「キリストを運ぶ人」になると、わたしは前に述べたことがあります（一般謁見講話、2016年1月30日参照）。このことは、奉献生活や司祭職に招かれ、「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」と進んでこたえた人々にとりわけ当てはまります。彼らは、神のいつくしみが人々に豊かに注がれるために、宣教への新たな熱意をもって神殿の聖域から出るよう招かれています（聖香油のミサ説教、2016年3月24日参照）。教会が必要としているのは、真の宝を見つけたために穏やかで自信に満ちた心を持ち、喜びをもって皆にそれを伝えるために出かける聖職者です（マタイ13：44 参照）。

キリスト教の宣教について語る際には、もちろん多くの疑問が生じます。「福音宣教者であることは何を意味するのでしょうか。福音を告げ知らせる力と勇気はだれから与えられるのでしょうか。宣教へと駆り立てる福音宣教の論拠は何でしょうか」。これらの疑問には、福音の中の次の三つの箇所について深く考えることによって答えることができます。すなわちイエスがナザレの会堂で宣教を始めた場面（ルカ 4：16-30参照）、イエスが復活の後にエマオの弟子たちと共に歩んだ道のり（ルカ24：13-35参照）、そして最後に、種のたとえ話です（マルコ4：26-27参照）。

イエスは聖霊によって油を注がれ、派遣されます。宣教する弟子であることは、キリストの使命に積極的に参与することを意味します。イエスはご自分の使命について、ナザレの会堂で次のように述べています。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ 4：18-19）。これはわたしたちの使命でもあります。すなわち「聖霊によって油を注がれ」、みことばを伝えるために「兄弟姉妹のもとに行き」、彼らのために救いの道具となるのです。

イエスはわたしたちの歩みに寄り添っています。人々の心にわき上がる疑問や、現実から生じる課題を前にして、わたしたちは当惑し、自分には能力も希望もないと感じてしまいます。キリスト教の宣教は単なる非現実的な幻想であると考えたり、少なくとも自分の力の及ばないものであると思ったりするおそれがあります。しかし、エマオの弟子たちの傍らを歩く復活したイエス（ルカ 24：13-15参照）のことを考えるとき、わたしたちは自信を取り戻します。この福音箇所には、みことばが告げられ、パンが割かれる場面に先立つ真正で独自の「道の典礼」があります。それは、わたしたちの一つひとつの歩みにイエスが寄り添っておられることを伝えています。この二人の弟子は、十字架刑に打ちのめされ、砕かれた希望と果たせなかった夢を心の中に抱きながら、挫折の道をたどって家に戻ります。彼らの中で、悲しみが福音の喜びに取って代わります。「イエスは何をなさるでしょう」。イエスは彼らを裁かずに、彼らとともに歩みます。壁を築くのではなく、新たな突破口を開きます。イエスは彼らの失意を少しずつ変えてゆき、彼らの心を燃え立たせ、そしてみことばを告げ、パンを割くことによって彼らの目を開きます。このように、キリスト者は宣教の使命を独りで担うではありません。キリスト者とは、たとえ疲れ果て、人々の理解が得られなくても、「イエスがともに歩み、ともに語らい、ともに呼吸し、ともに働いてくださることを知る者です。宣教活動のただ中では、イエスがともに生きてくださっていることが感じられます」（使徒的勧告『福音の喜び』266）。

イエスは種を育てます。最後に、宣教するすべを福音から学ぶことが重要です。わたしたちはしばしば、たとえ悪気はなくても、ある種の権力欲や改宗の強要、偏狭な狂信主義にとらわれます。しかし福音は、成功と権力の偶像化、組織への過剰なこだわり、さらには奉仕より征服を優先しようとする考え方を退けるようわたしたちを招いています。神の国の種は、たとえ目に見えないほど小さく、時には取るに足らないものに思えても、神の絶え間ない働きによって徐々に成長し続けます。「神の国は次のようなものである。人が土に種をまいて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」（マルコ 4：26-27）。神はわたしたちの想像を超えたかたであり、つねに広い心でわたしたちを驚かせてくださいます。神はわたしたちの働きに、人間の打算をはるかに超えた実りをお与えになります。これこそが、わたしたちにとってもっとも大切な信頼です。

わたしたちは福音に基づくこの信頼をもって、宣教の根本である聖霊の静かなわざを受け入れます。絶えず観想的な祈りをささげなければ、司祭職への召命もキリスト教の宣教もありません。したがってキリスト者の生活は、みことばに耳を傾け、とりわけ聖体礼拝において主との個人的な交わりを深めることによって育まれなければなりません。聖体礼拝は、わたしたちが神と出会う特別な「場」です。わたしは、とりわけ司祭職と奉獻生活への新たな召命を神に願い求めるためにも、主とのこの深い友情を生きるよう皆さんを強く励まします。神の民は、福音のために生涯をささげる司祭に導かれる必要があります。したがってわたしは、小教区共同体、教会内の諸団体と多くの祈りの会に対し、くじけずに主に祈り続けるよう求めます。主が収穫のために働き手を送ってくださいますように。また、福音を愛し、兄弟姉妹に寄り添い、神のいつくしみ深い愛の生きたしるしとなることのできる司祭を、主がわたしたちに与えてくださいますように。

兄弟姉妹の皆さん、とりわけ若者に対してキリストに従うよう説き、提案する情熱を、わたしたちは今も取り戻すことができます。信仰を退屈なもの、単なる「果たすべき義務」ととらえる世論の中で、わたしたちキリスト者の若者は、イエスの姿に絶えず魅了され、イエ

スのことばと行いによって問いかけられ、駆り立てられることを望んでいます。そして彼らは愛のうちに喜んで自らをささげ、主によって人間的に充実した生活を送るという夢を抱いています。

救い主の母、至聖なるマリアは、自らの若さと情熱をみ手にゆだね、神に対して同じ夢を抱く勇気をもっておられました。マリアの取り次ぎによって、マリアのように開かれた心、主の呼びかけに「はい。わたしはここにおります」と答える心構え、そして全世界に主を告げ知らせるためにマリアのように出向く（ルカ1:39参照）喜びがわたしたちに与えられますように。

バチカンにて
2016年11月27日
待降節第一主日
フランシスコ

日本基督教団「教団新報 NO.4860」(2017.5.6)

◇宣教研究所委員会：「継続・新規取り組み事項を確認」

宣教研究所委員会は3月6日に第1回委員会を開催し、小堀委員長、岡本書記を選任した。

はじめに教規並びに関係規則より委員会の使命と性格を確認し、①宣教内容の把握、②教会形成の研究、③宣教対象の時代的・社会的特質の理解、④宣教方策の研究などに当委員会の基本的使命のあることを確認した。

今期委員会において扱うべき具体的課題としては「聖餐ハンドブック」の改訂ならびに引き継ぎ事項の精査を、委員長の責任において行うこととした。新事項としては、以下の4分野を研究対象として挙げ、それぞれにプロジェクト委員会を設置して課題の検討に当たることとした。

- (1)「青年伝道」の推進方策について（担当：野村、小泉、宮崎、他外部委嘱委員数名）。
- (2)教会と付属施設との関係について（担当：岡本、村上、小林）。
- (3)同時代研究「宣教対象の構造的変化、趨勢の研究」（担当：今後選任）。
- (4)他教派との連携について（担当：今後選任）。

いずれも今日的対応を迫られている重要な課題であり、これらの中にこそ「国家と教会」の問題が現象していることを確認した。

特に青年伝道の課題に関しては、教団の信徒構成における青年層の極端な減少が教団の将来に直接的に影響を及ぼすものであることを認識し、青年宣教の現状と課題を洗い出しつつ、有効な宣教方策の策定を行うことが焦眉の急務となっている。

これらの点については、教団においても執行部の主導で事柄が進められているが、それらの働きとも連絡を取りつつ研究機関としての宣研の使命と課題に取り組んでいきたいと考えている。

◇宣教委員会：「宣教方策会議、宣教基礎理論についての討議」

第40総会期第1回宣教委員会が3月13、14日、教団会議室にて招集者・米倉牧師による開会礼拝により始められた。礼拝後、自己紹介し、引き続き組織について協議し、米倉委員長、岸書記を選出した。

今日またこれからの教団の状況において宣教委員会のなすべき働きは何かということの思い描き、委員会の意義についてそれぞれの思いを語り、前回からの申し送りを確認した。特に「障がい」を考える委員会の設置は継続となり、「牧会者とその家族のための相談室」設置推進について並行して考えていくこととした。

更に、伝道、教育、社会の常設委員会、全国教会婦人会連合、全国教会幼稚園連絡会、日本キリスト教保育所同盟との緊密な連携を確認した。

2日目は教規で定められている「宣教方策会議」のあり方をめぐり、とりわけ前回の宣教方策会議を受け止め丁寧な協議に時間を多く割いた。

改訂宣教基礎理論の第2次草案が常議員会預かりのままで、本来、教団の宣教方策を掲示すべき宣教委員会（教規41条）が、様々な立場に配慮しすぎて、しっかりとした宣教方策を立てることが出来なかった点が指摘された。特に、青年伝道、幼稚園・保育所との連携の課題など、多くの具体的な課題が示され、これらを共有することの必要性が語られた。また、日本伝道に寄与する宣教基礎理論であることが期待されるとの意見があった。

日本聖公会 【日本聖公会 管区事務所だより（2017年2月25日 第319号）】

「教会の公共性」

管区事務所総主事 司祭 エッサイ 矢萩 新一

「皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。」（使徒言行録2：44-45）

先日、日本キリスト教連合会の定例講演会で、「キリスト教の公共的役割」についてのお話を聞きました。他者に対して自己を縦軸、集団に対して個人を横軸とするならば、今のキリスト教は他者と集団寄りではなく、自己と個人寄りとなってしまっているのではないかと問われました。「神の国」は、天皇を中心とした国、死後に行く先祖の住んでいる善い所という日本的宗教の枠組みや、抽象的な概念に押し込めるのではなく、常にイエスさまが顕現される過去・現在・未来を包括した具体的な世界、私たちの衣食住について祈ることのできる世界だと捉えて、様々な格差を解消し予防していくのがキリスト者の努めなのではないでしょうかと、賀川豊彦の精神に基づく生活協同組合などを紹介しながらお話してくださいました。

私的な領域・公的な領域、信仰的な領域・政治的な領域と極端に二分化してしまうのではなく、その中間にある「公共」的な領域に私たちはもっと関心を持てればと思うのです。宗教法人は「公益法人」に分類されますが、その「公」が何を意味しているのかによって、その内容は大きく変わってきます。日本聖公会の「公」は、日本という国の公益だけに留まらず、世界に連なるあらゆる人々と神さまの恵みを分かち合う「神の国」という意味が込められていると思います。

教会だけが「公共」の領域にあるわけではありません。他の宗教も、NPOや様々な福祉団体も同じような目的を持って公共の働きをすでに担っていますし、平和実現という共通の目的をもって、他教派・他宗派で手を取り合って活動しています。「Anglican Communion of Japan」ではなく、「Anglican Communion In Japan」であることも、その公共性を表していると思います。そういう意味で、多様性の一致を重んじる聖公会が果たせる役割は大きいのではないのでしょうか。私たちは、「ハレルヤ、主とともに行きましょう」と、神さまがすでに働いておられる「公」の世界に押し出されていることを常に忘れずにいたいと思います。



日本の法の最高法規である日本国憲法は、基本的人権の尊重を最大の目的としています。基本的人権の根拠は神さまの愛です(創世記1章27節)。すべての人はかけがえのない存在なのです。御子イエス・キリストを犠牲にする程に神さまは愛しています。そして憲法は、主権在民、つまり民主主義を基本的人権を守る仕組みとしています。民主主義が不健康に陥り機能しなくなれば、基本的人権は侵害されます。コミュニケーションは、民主主義の健康には欠かせません。私たちのあらゆる決断には情報が不可欠だからです。テロ等準備罪法案(「共謀罪法案」)は、基本的人権を侵害し、民主主義を機能不全にする法案です。基本的人権の根拠が聖書にある以上、この危機をクリスチャンとして黙ってはられません。

共謀罪を創設するという事は、現実に人の命や身体や財産が脅かされる前に、あやしい人を調べて処罰するという事です。こうした国の処罰・捜査権限の拡大は安全な暮らしを保障する朗報でしょうか。実は違います。処罰権限の拡大というのは、実は恐ろしいことです。この世の国は、数々の過ちを繰り返してきました。国家権力を握る為政者に都合が悪い者を、犯罪者として調べ、処罰してきました。その見せしめによって、為政者に都合の悪い思想・信仰・学問・言論は封殺されました。拷問・処刑により多くのいのちが失われました。日本もそうでした。特に約70年前まで、不敬や国体を否定する思想を理由に、治安維持法等の法律によって、人々は監視され、拘束・拷問・処罰されました。植民地であった朝鮮半島でもこの法律により多くの犠牲がありました。こうした歴史的な経験上、処罰範囲が拡大されることは危険という認識が必要です。

今どき捜査や処罰は濫用されないでしょうか。いいえ。共謀罪のない現在も、冤罪は生まれています。不当な拘束も現に行われています。再審によって無罪となった方も、逮捕時は真犯人に違いないと一斉に報道されました。残念ながら、濫用や誤りは起きています。

現在(2017年5月3日)通常国会で審議中のいわゆる「テロ等準備罪」を定める法案(「共謀罪法案」)は、「組織的犯罪集団が」「犯罪を計画」「準備行為」をしたときに処罰するという法案だから、処罰要件が厳格で一般人は、対象にならないから大丈夫でしょうか。残念ながらそれも違います。犯罪を目的としない団体(教会も)、夫婦、友人も「組織的犯罪集団」とされます。「犯罪を計画」「準備行為」も何を意味するか明記していません。疑われている時点で一般人ではないという答弁もありましたが、何が疑われないことなのか、それは、もう政権次第です。277もの犯罪を対象としているから、すべてのコミュニケーション、人間関係が対象範囲となります。何かにひっかけることができるのです。教会だから対象外ということはありません。法案が成立したら、国家による監視は、法に基づく捜査として行われます。共謀罪法案が機能する時、あらゆる言論は封殺され、民主主義は絶えるかもしれませぬ。

70年以上前、国家体制を否定することを処罰対象にした治安維持法によって、日本のキリスト者も拘束されました。日本のキリスト教会の多くは、当時の国家体制を肯定し否定しなかったのに。監視を恐れ、処罰を恐れ、信仰上の罪を犯してまで大政翼賛したのに。

今の日本に遣わされたクリスチャンとしてまず神の義を第一とすることは何を意味するのでしょうか。歴史に向き合い、悔い改めとして、戦前回帰の共謀罪法案、国家の神格化、軍国主義化、民族差別に対し、何をすべきでしょうか。また主が愛する日本にいる民の基本的人権が蹂躪される今、見張り人として警告する働きを担わされているのではないのでしょうか。軍備と差別を駆り立てる脅威論の流布、武力による威嚇が振りかざされる中で、平和をつくる者として、神さまの愛、一人一人がかけがえのない存在であることを伝える者として歩むことを求められている時代だと思えます。(千種キリスト教会員)

◇ 2017年度 施政方針 (概略)

「神の宣教に仕える教会」

— 「むしろ」という御業を行ってくださる神を信じ、今を生きる。たくましく、しなやかに—

教団委員長 島津 吉成

「さて、兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい」(ピリピ12)。

2017年はルターによる宗教改革から500年、東洋宣教会ホーリネス教会創立100年となる記念の年です。この100年は、さまざまな状況の変化に対応し、格闘しながらの歩みであり、輝かしい面ばかりではなく、大きな痛みや失敗を経験した歴史でもありました。

「前進」と訳されている言葉は、軍隊が行軍するとき、工兵隊が本隊よりも先に行き、道なき道を切り開き、木や岩などの障害となるものを取り除きながら進む様子を表します。この100年を振り返るとき、さまざまな障害物を取り除くようにして、神ご自身が宣教の業を力強く進めて来てくださったことに気づきます。

現代に生きる私たちも、さまざまな厳しい状況に直面しています。牧師の高齢化や献身者の減少により兼牧教会が増加し、また各個教会における教会員の高齢化、青少年の数の減少、それに伴う教会財政の弱体化などにより、一つの教会で自立していくことが難しい状況が起こり、統合や閉鎖(巡回地化)する教会も出ています。これらの状況に対応するために、勸士制度の有効活用と共に、近隣教会との統合、他教団の教会との宣教協力、インターネット礼拝などの実施や、さらなる意識の変革が求められています。また相次ぐ牧師の問題は、聖書学院時代からの継続的な牧師教育の必要性という大きな課題を私たちに突きつけています。

教会の外に目を移すと、貧富の格差、少子高齢化や介護問題、頻発する大規模災害など、私たちが遣わされているこの地において取り組むべき宣教の課題は数多くあります。また私たちの国では、ナショナリズムが国家神道体制と結びついてきた歴史があり、国家の権威が神の権威の上に立とうとする戦いは今も私たちの中にあります。私たちは、このような状況の中で、今こそ、「イエスは主である」との信仰に立つことが求められています。

このような教会内外におけるさまざまな危機的状況は、私たちに変革・転換を求めてきます。これらの課題に前向きに取り組み、応えていくことをとおして、福音が前進していくことを私たちは信じています。そこで、今年度は次の3つを宣教の重点課題として取り組んでいきます。

1. 次世代育成「ジャムがジャムで終わらないために」

ユースジャム2016は、大きな祝福をいただきました。いただいた恵みに応える新たな歩みがそれぞれの教会、教区で始まっています。教団はそれらの働きを支援していきます。これまで、キャンプ委員会(総務)、ユースジャム(宣教局)、CS研究会(教育局)、MMお茶会など、各局にまたがっていた次世代育成に関わる働きを一つにまとめ、重点的に、継続的に取り組んでいきます。

2. 宣教協力「宣教の前進のために」

教団教派における宣教協力は不可欠です。昨年開催された第6回日本伝道会議で提唱された国内の宣教協力に必要なインフラ整備の鍵は、次の2つです。

①教団教派のネットワーク作り

日本福音同盟(JEA)や日本福音連盟(JEF)の交わりを通して、各教団教派の宣教協力関係を深め、各神学校の協力態勢を強化してまいります。

基督兄弟団とは、さらに協力関係を強め、この秋には、東洋宣教会ホーリネス教会創立100周年記念集会を、かつては同じ一つの群れであったきよめ派の諸団体に呼びかけて開催する予定です。

②地域教会のネットワーク作り

防災ネットワークの関係者は、災害などのもしものときに頼りになるのは、遠くにある同じ教団の教会よりも、自転車で行き来できる他教団の教会だと語っています。

地域の宣教協力においては、牧師同士、牧師夫妻・家族が日頃から交わりを持ち、役員、教会員もお互いに知っている関係を築いていくことが理想です。まずはJEFやJEA内の協力や交わりから始めて、それがさらに広がって行くようにと願っています。

3. 厚生年金「新しい厚生制度に向かって」

教団の厚生制度は、謝恩金制度として整備されてきました。このことは、教職者が隠退まで宣教のわざに励むために、教団が取り組むべき大切な課題です。

この教団の厚生制度が、社会の変革と共に新しい制度が変わっていく必要が生じてきました。これは、法律で定められていた宗教法人を持つ教会への厚生年金保険の適用が拡大強化されたことによるものです。そこで、全教職者の厚生年金保険・健康保険の加入を目指し、2020年までの間に、段階的に厚生制度を変えていくことを目指します。信仰共同体である教会もまた、社会の構成メンバーとしての意識改革が求められています。このチャレンジに応えつつ、世から垂離せず、また世に埋没するのでもない、世に遣わされた教会の姿を目指します。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.742」(2017.7)

第41回 全国聖会2メッセージ：ドミニク・ヤオ 「使徒行伝にみる3つの働き」

今日、私は使徒行伝全体を通して3つのことをお話したいと思います。

1. 聖霊の働き

私たちは使徒の働きを通して、共同体の中に働かれる、聖霊の働きを見ることができます。その第一に挙げられることが「一致」です。2章の14節を見ると弟子たちが一つとなっていたところに、聖霊が訪れてくださったことが分かります。二つ目に挙げられるのは必要が満たされることです。4章には信者たちが財産を共有し、互いの必要が満たされていたことが書かれています。

先日、シンガポールで世界アッセンブリー大会が開かれました。必要な予算は5000万円ほどで、ホストである私たちがすべて用意しなければなりません。私は非常に心配して祈りましたが、終わってみれば、すべての必要が満たされていたのです。

三つ目は力の賦与です。2章で弟子たちの上に聖霊が注がれましたが、その後も使徒たちが手を置き祈り、力が分け与えられ、聖霊の顕れが共同体の中に起こっています。聖霊は今も突然皆さんの上に臨まれます。聖霊が臨み、神の働きが出来るようになるのです。救いの働きは人ではなく、聖霊の働きです。

2. 教会の働き

4章、5章、そして8章に教会の働きが書かれていますが、教会の働きは自分を捧げることによって進められます。もし自分を捧げないのであれば、救いは意味がありません。ペンテコステ運動は主に捧げる運動です。初代教会は常に迫害、死と隣り合わせでした。彼らはイエス・キリストにすべてを明け渡していました。私たちも同じように、自分を捧げることが求められています。私たちは便利さと消費の世界に生きていますが、ライフスタイルに気を付けなければなりません。アナニヤとサツピラは欺きと自己中心によって裁きを受けました。キリストに留まり、聖霊の力をいただきましょう。

3. リーダーの働き

教会はリーダーが動かなければ、何も動きません。リーダーが新しい働きをしなければ教会は死んでしまいます。6章では使徒たちが教会の組織を変え、祈りと御言葉に専念しました。聖霊に満たされた新しい働き人が生まれ、やもめの必要が満たされました。また使徒の働きには教会のリーダーシップが継承されてゆくことも記されています。13章ではバルナバからパウロへと引き継がれています。

私たちは常に新しい世代のリーダーを必要としています。私は今、特に45歳以下の方々にチャレンジしたいと思います。人々はキリストを見ることはできませんが、教会を見ることはできます。聖霊に満たされ、自分を捧げて教会の働きに加わり、宣教に遣わされましょう。

(三宅規之)

OMF 宣教ニュース (2017 年 5 月)

「フィリピン・パワー」

日本総主事 菅谷 庄一郎

3月20日にブレス・ジャパン（日本を祝福しよう）という集会在日フィリピン人教会協力会の主催で北の市民センター8階で開かれました。このグループのビジョンは、日本に住むフィリピン人クリスチャンを通して、フィリピン人と日本人に伝道し、さらに日本にあるフィリピン人教会から世界に宣教師を送り出すというものです。プログラムの後半に日本福音同盟・総主事の品川謙一師から日本のための祈りの課題も出されました。

ある先生によるとフィリピン人の性格は宣教向きなのだそうです。①フィリピンはアジアに位置し、アジアで唯一のキリスト教国である。②東洋と西洋の両方の影響がブレンドされている。③敵がない。④適応力がある。⑤忍耐力がある。⑥新しい言語を学びやすい。⑦専門的技術を持った人が多い。⑧英語ができる。⑨快活で友達をつくりやすい。⑩勤勉でよく人に仕える。⑪創造的である。⑫写真が好き、など。

こんな人が1200万人、210の国々に散らされています。そのうち約百万人がクリスチャンだそうです。フィリピン人のメイドさんによって救われたイスラム教徒の人の証しは感動的でした。21世紀の宣教は、正式な宣教団体から派遣される宣教師・専門職ワーカーと共に、クリスチャンの留学生、移民、難民によってなされていくでしょう。みなで心をつなげて祈り、燃やされて帰りました。

OMF 宣教ニュース (2017 年 8 月)

「帰国者聖研」

日本ディアスポラ伝道 横山 好江

海外で主イエス様へと導かれた日本人が帰国後、地域の教会に繋がれるように、日本でも信仰生活を続けられるように助ける働きを帰国者ミニストリーと言い、私もこの働きに関わっています。帰国者の海外での経験と、日本で教会に行くと遭遇することが違うため、そのギャップを越えることができるように手助けします。一例を挙げますと、Aさんはイギリスの現地教会で導かれ、帰国後に2～3の教会礼拝に出席しました。何か腑に落ちない様子でしたので話を聞きますと「日本の教会では信徒同士の会話でイエス様のことを話さないのでしょうか」との答え。この方がイギリスで行っていた教会では、信徒同士が日常的に「イエス様がああしてくれた、こう語られた」とよく話していたそうで、帰国後に行った教会ではそうではなかったのと同じ信仰なのだろうか、同じイエス様なのだろうか、と前に進めないような気持ちになっていたようでした。その戸惑いを受け留め、日本の教会では日本の文化に相応しい表現をする、信仰が違うわけではないと説明します。文化的な通訳と言えるかもしれません。このような役割をする人が教会内にいれば良いのかもしれませんが、帰国者のための交わりですと、相手に失礼とか傷つけるとか心配せずに話せて、荷を下ろし、前に進むことができます。帰国者のための交わりは学生対象であればKGKと協力します。現在、帰国者および留学生担当のKGK主事がおられますので以前よりやり易くなりました。独身の有職者向けのもの、駐在員家族向けのもの等、様々にあります。

私が東京にて月例で聖書の学びを続けているのは、ロンドンのウィンブルドンで行われていた聖研に集っていた婦人方です。今は声をかけあってそれ以外の方達も集っています。一人一人の信仰が成長しますようにお祈りいただければ幸いです。



「21世紀の世界の現実と東アジアにおけるキリスト教の宣教について」

(2015年7月 OMF インターナショナル150周年記念集会におけるマレーシア人・フワ・ユン牧師のメッセージの要約)

非西洋の国々の教会が宣教を担うようになってきた。150年前、イギリスがもつとも影響力のある国であり、ハドソンテーラーの宣教は中国人の魂が救われることであった。現代世界においては、中国はアメリカと肩を並べるほどの大国となった。中国の社会学研究者のコメントに次のようなものがある。「過去20年に亘り西洋社会について研究した結果、我々は西洋文化の中心はキリスト教であることがわかった。だから、西洋はこれほど力を持ち続けている。キリスト者の社会的・文化的な生活における道徳的基盤が資本主義の出現を可能にし、民主的政治への移行に成功させた。我々はこのことを確信した。」このように中国にはキリスト者ではないが、聖書の価値観が中国という国家を作り上げると信じている人々がいる。現在、世界の人々の31.4%がキリスト者と言われている。宣教に関して6つの世界的な傾向が見られると私は思う。

(1) 世界のキリスト教の中心の移動

アフリカ、アジア、南アメリカの世界全体のキリスト者人口における割合は、1900年16.7%、2010年63.2%である。アジアにおいては、中国、インド、インドネシア、韓国、フィリピンで教会が成長している。1998年聖公会のランバス会議においてホモセクシャルのキリスト者を受け入れることができるか審議されたが、主に非西洋の教会指導者たちによって否決された。非西洋からのリーダーたちの方が保守的な教理を維持していることが明確となった。

(2) 世界における異文化宣教師派遣国の変化

1992年には35.6%、2000年には50.6%が非西洋(ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドを除く、Operation World より)からの宣教師の全宣教師数に対する割合である。多くの北アメリカの宣教団体では、引退する宣教師の働きを引き継ぐべき新人宣教師の数は足りていない。非西洋からの宣教師の数が、西洋人の数を超えた。米国で開かれているアーバナ宣教大会においては30%以上の参加者が非西洋人である。宣教師を送り出す教会はますます非西洋となる傾向が見られる。西洋はポスト・キリスト者、世俗化の波に飲み込まれ、キリスト教に対して敵対的な雰囲気もあり、異文化宣教への情熱を失いつつある。

(3) キリストの弟子となることの理解が浅いという問題

非西洋において教会が成長しているとはいえ、それらの地域での教会に問題がないわけではない。アジアでは、韓国において1960年代、70年代に教会は爆発的に成長したが、現在はむしろ縮小していく傾向にある。他の国々においても、表面的な信仰、縁故主義、お金や性的問題で失脚する牧師が増加している。アフリカにおいては、かつて東アフリカのリバイバルの中心であったと言われるルワンダにおいて悲惨な虐殺が起こったが、当時ルワンダでは国民の90%以上がキリスト者であったと言われている。その背景には「繁栄の神学」が広がっていたことが指摘されている。聖い品性が求められている。キリスト教の質が間われている。西洋においてはリベラル神学や世俗化の影響で教会が弱体化し、かつてあったような教会学校で教育され忠実なキリストの弟子として育てていく子供たちはますます少なくなっている。「謙遜、誠実、質素な生き方」を目指すべきであるとケープタウン決議宣言でも強調されている。

(4) 文明の発達に伴う国家間のダイナミクスの変化

「冷たい戦争」以後の時代になった。サムエル・ハンチントン「文明の衝突」で記されていることが現実となっている。特に2001年9月11日の事件以降、アメリカ(と北大西洋条約機構)、ロシア、中国、イスラム圏、日本、インドなどの国々の間に緊張が生じている。もはや西洋だけが唯一の経済的・政治的パワーではなくなった。多くの国々が力をもつようになった。

次の数十年に宣教に関して二つに分かれていく傾向が見られるだろう。一つは、宣教がしばしば西洋の植民地主義や経済的優越のもとに進められたゆえにキリスト教は文化的に西洋のものだというイメージのままの宣教である。かつて中国人の知識人は次のように言った。「一人のキリスト者が生まれれば、一人の中国人が減る。」インド人のある牧師は次のように言った。「インドはいのちの水を欲している。しかし、それはヨーロッパのカップに注がれるのではない。」福音の土着化・文脈化への努力は以前にも増して急務である。

もう一つは、伝統的な宗教の復興のただ中での宣教である。また、過激なイスラム主義、ヒンズー主義（インド）の台頭が見られる。様々な形の仏教がスリランカやミャンマーなどの国々で国家主義と結びついている。少数派であるキリスト者の信教の自由が脅かされている。ある地域ではキリスト者たちが信仰のゆえに殺害されている。

(5)キリスト者の迫害

グローバル化と近代化は必ずしも自由を生み出していない。2015年における世界の自由は、独裁政権、テロリストの増加などによって9年に亘って侵害され続けているという報告がある。(Freedom house, 2015) 迫害の背景にあるものは、宗教的国家主義、イスラム原理主義、独裁的不安定、世俗的非寛容である。迫害は全世界的になっている。アルカイダ、Is' s の台頭によってキリスト者は深刻な迫害を受けている。シリアのある教会指導者は次のように言った。「私達は殉教は受け入れる。しかし、虐殺はNOだ。」

(6)福音はこの時代に生きる者とどういう関係があるのか。

ジョン・ストット師はある時スコットランド大学で学ぶ二人の大学生と話し、福音の真理を確信してもらおうと説明した。しかし、会話の最後に彼らは次のように言った。「福音が真理であるかどうかなんてどうでもいい。それは現代社会に生きる僕たちとは何の関係もないのです。」福音が今を生きる私たちにどういう関係があるのかという問いは重要である。

多くの人々は福音が真理なのかどうかよりも、現実生活において「役に立つ」のかどうかに関心がある。多くの人々が「繁栄の福音」に魅かれて行く理由がここにある。しかし、それらの教えに魅かれる中産階級や金持ちにとっては貧欲がその動機かもしれないが、多くの貧しい人々にとっては、貧欲というよりは、生き延びるための闘いなのである。アジアにおいて多くの人々が、肉体の癒しや悪魔的な力からの解放を経験してキリスト者となる。香港やシンガポールの銀行員は「風水」（古代中国の思想で、建物や墓などのふさわしい位置を見極めるために用いられてきた、気の流れを物の位置で制御する思想。）に信頼し仕事をする。聖霊の超自然的な働きに無関心な西洋の合理主義的なキリスト教は非西洋に住む人々の心に届かない。近代化、経済発展、民主化、政治的安定、などのテーマについて福音は答えをもっているのかどうか人々は知りたいと思っている。

(日本語への要約：菅家庄一郎)



あとがき

暑かったり、涼しかったり、変化の激しい夏が過ぎ、秋が速足で忍び寄って来ています。予定よりだいぶ遅くなってしまいましたが、ここに「日本宣教ニュース」第10号を皆様にお届けすることができることを感謝致します。今回号から、今まで2段組みであったところも、全て1段組みに統一いたしました。また、今回号は、編集者の不手際で「巻頭言」はなしとなりました。

しかし、その分を補って余りある「第32回日本福音同盟（JEA）総会」で行われた、シンポジウム「日本宣教の課題と展望」における JEA 宣教委員会宣教研究部門の発表原稿を、少し長文ですが、宣教委員会のご了解を得て掲載しました。宣教研究部門では、JCE6で出された宣教の課題を受け、JCE7に向けての今後の研究テーマとして、①教会の再生、②次世代育成、③宣教ネットワークの構築をあげています。これらの問題は、すでに教団レベルで取り組まれているところもあり、今後それらの教団の宣教研究部門とも連携しつつ、取り組みをなしていくこととしています。

今回号では、今までになかった記事を取り上げました。一つは、ローマ教皇のメッセージであり、もう一つは OMF や JOMA 等の宣教団体の記事です。

ローマ教皇の「宣教という使命は、キリスト者の生活に飾りのように付け加えられるものではなく、信仰そのものの核心です。主との結びつきには、みことばを告げる預言者として、また神の愛のあかし人として世界に派遣されることが伴います。」という言葉は、私たちも重く受け止める必要があると思われました。また、OMF 菅谷総主事が「21世紀の宣教は、正式な宣教団体から派遣される宣教師・専門職ワーカーと共に、クリスチャンの留学生、移民、難民によってなされていくでしょう。」と言われていることは、グローバル化した世界において、宣教の働きの担い手が多様に用いられていることを示すと共に、この世の寄留者である私たちのあり方を、逆に考えさせられる言葉のように思います。

（初穂）

献金者名（2017年4月～2017年9月）

◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。（敬称略）

崎山清、柴田美枝子、島田治夫、鈴木陽一、寺田文雄、中島伸一、松原正幸、柳下弘、清瀬グレースチャペル、清瀬福音自由教会、センド国際宣教団、日本同盟基督教団、本郷台キリスト教会、やしおホープフルチャーチ



◎ 『「震災と信仰調査」報告書』

購入ご希望の方は、東京基督教大学国際宣教センターまで。



「震災と信仰調査」報告書

2016年7月

日本福音同盟
宮城宣教ネットワーク
東京基督教大学 日本宣教リサーチ
アジアアクセス

「震災と信仰調査」報告書

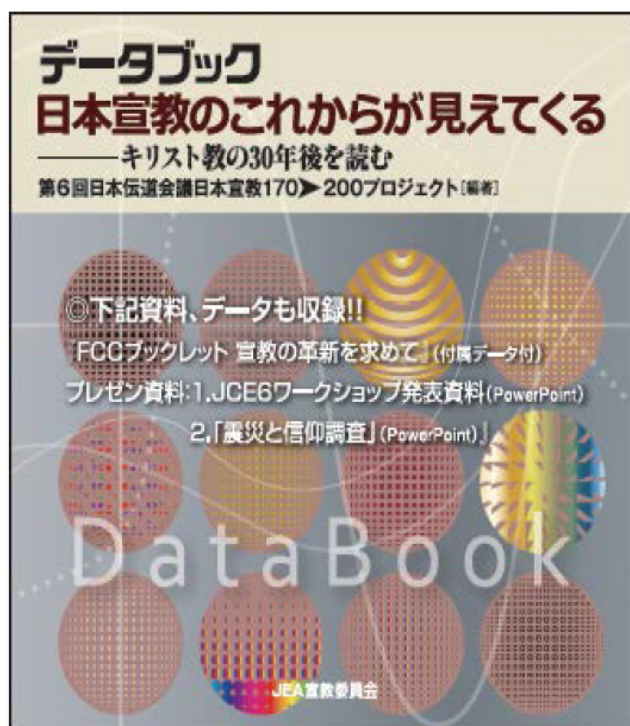
発行日：2016. 7. 20
編著者：大友幸一
柴田初男
ヒューレットえり子
発行：東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
定価：1,000円＋税

◎ 『東日本大震災と教会増殖』(大友幸一) 【定価500円＋税】

購入ご希望の方は、東京基督教大学国際宣教センターまで。



データブック 『日本宣教のこれからが見えてくる』 CD-ROM 版（9 月末発売）



グラフや図がカラー
表も見やすい
有用なデータが満載
プレゼン資料も収録
定価 1,000 円＋税

【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」—キリスト教の30年後を読む』
- 『データブック FCC ブックレット 宣教の革新を求めて』（付属データ付）
- プレゼン資料： 1. JCE6 ワークショップ発表資料（PowerPoint）
2. 「震災と信仰調査」（PowerPoint）』

【編著】第6回日本伝道会議「日本宣教170 ▶ 200 プロジェクト」

東京基督教大学国際宣教センター 日本宣教リサーチ

【発行】日本福音同盟（JEA）宣教委員会

【お申込み】住所・氏名・必要冊数・Email アドレスを、以下の連絡先にお送りください。

なお、書籍代+送料実費がかかります。

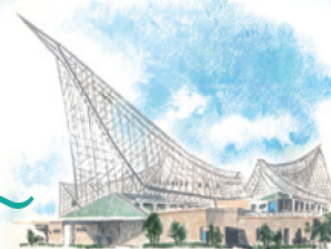
E-mail : fcc@tci.ac.jp 又は FAX:0476-31-5521



2017 *Mission Forum in Kobe*

JEA宣教フォーラム @KOBEBE

日本宣教のこれからを考える ～JCE6から生まれる希望～



昨年9月に神戸で行われた日本伝道会議は、各方面、各分野で新しい宣教協力の働きが生まれています。次回伝道会議に向かって、新しい協力の広がりや深まりをめざしていきましょう。教職、信徒、所属教団を問わず、地元神戸のみならず、みなさまのご参加を期待してお待ちしています。特に、若い世代の方々の参加を期待しています。

○ JCE6をRe-VISIONする

JCE6では、何ができて、何ができなかったのか。今後の日本伝道会議は、何をめざすのか、またどのように行うのか。JCE7にむかうよい動機づけとスタートの機会となることを願って。

○ JEAをRe-VISIONする

JCE6において共有したビジョンにもとづいて、JEAを結び目としてさまざまな分野で宣教協力のネットワークがスタートした来年は50年を迎えるJEAが、その使命を明確にして、JCE7にむかってどのように宣教のインフラを築いていくのか。

○ プロジェクト&アナログ

JCE6においてスタートしたプロジェクト（のいくつか）とアナログから経過報告を聞き、コイノニアに分かれて、各地域や教団教派、そしてJCE7開催地域への連携を考える。

2017年9月25日(月) 13:00～9月26日(火) 12:30

会 場 ●三宮研修センター (JR「三宮」徒歩5分)

〒651-0085 兵庫県神戸市中央区八幡通4丁目2-12 FR IIビル (神戸市役所東正面) TEL:078(232)0081

登 録 料 ●3,000円 ※25日夜の【一般公開】のセッションは登録費は無料です。献金があります。

申し込み ●JEAホームページ <http://jeanet.org/> から

プログラム P r o g r a m

25日(月)

- 13:00-13:30 開会礼拝
- 13:30-17:00 JCE6プロジェクト、アナログの報告(神戸コイノニアネットワーク)
- 19:00-21:00 【一般公開】「データブック-日本宣教のこれからが見えてくる」をもとに30年後を読む(JEA宣教委員会)

26日(火)

- 9:30-12:00 JCE7にむかって(JCE準備室)
- 12:30-12:30 開会礼拝

・食事や宿泊は各自でお願いします。

・この宣教フォーラムに合わせて「JCE7へのガイドブック」が発行される予定です。ご期待下さい！。

主催：JEA 宣教委員会、コイノニアネットワーク@神戸

後援：神戸宣教協力会、神戸アナログ宣教委員会、日本伝道会議準備室

JEA 事務所：〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル内 TEL: 03-3295-1765

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR) は、この4月で発足から4年目を迎えました。旧教会インフォメーションサービス (CIS) の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき、活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2017年度は、JCE6「日本宣教170➤200プロジェクト」の流れを引き継ぎ、新たに JEA (日本福音同盟) 宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の推進強化の働きに参画していくことになりました。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

JMR の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (詳細篇) のご提供
- (2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (概要編) のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金 (献金) は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金 (献金) 額の約 50% となります。

詳しくは、☎0476-46-1131 (TCI 募金係) までお尋ねください

郵便振替口座: 00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

- * お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。
(振替用紙がお手元にない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学大学院神学研究科委員長)
日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男